

巻 頭 言

「言い続けること、やり続けること」

宇田川 芳江

毎年七夕の頃、協会は東京都と次年度予算に係る懇談会を行う。以前は対都交渉といていたが、いつからだったか東京都の希望で懇談会という名称になった。名称は懇談会でも、協会としてはあくまでも対都交渉というスタンスでいる。

協会からの要望が多岐にわたるという理由で、懇談会に参加する担当ごとの都職員は 10 名を超える。協会の要望に対して、都からは、毎年判で押したような型通りの回答が示されるのみで、時間は短く、本当の懇談にはなっていない。要望に対して都の決まりごとや、担当として引継ぎされているであろう考えが述べられるのみで、要望に沿って改善されることはほとんどない。話し合いでもなく、結論が出されるわけでもない場である。なかばセレモニー化しているので、このようなことを繰り返して何の意味があるのかと心が萎えそうになるときもある。

参加の職員は課長職も含め、ほとんど 2～3 年で異動してしまう人たち。それでも、都内で唯一の中途失聴・難聴者の当事者組織として訴えるべきことは、あきらめずにしっかり訴え、理解し、記憶に残してもらわなくてはと踏ん張りながら、毎年続けてきている。

懇談会が終わると、都議会政党各派と都の次年度予算についてのヒアリングの時期になる。協会事務局は、各党派の事務局と日時の調整をしながらヒアリング当日の情報保障として要約筆記を準備してほしいと要望してきた。障害者権利条約の批准や障害者差別解消法の影響もあってか、少しずつ要約筆記を準備する政党が増えてきたが、聴覚障害者の議員がいるのにも関わらず、音声認識に頼り、頑なに要約筆記の準備を拒否する政党もまだある。今年是要約筆記者を同行し、音声認識を投影しているプロジェクターに半ば強引に要約筆記者のパソコンをつないだ。情報保障がどういうものなのかを、参加の議員に見てもらった。ときにはこのくらい強く出ないと理解につなげられないこともある。

聴覚障害者の団体はろう者の団体だけという認識で、ヒアリングを受け付けてもらえない政党があった。東京都身体障害者団体連合会事務局の方に仲介をお願いして、やっとその政党の議員 4 名と面談することができた。そのなかには厚生委員会のメンバーの議員もいたが、要約筆記をご存じない。協会から連れて行ったパソコン要約筆記者を見て「この人たちはどのような人なのですか？」と尋ね、パソコン要約筆記の画面を食い入るように見つめていたのが印象的だった。それなりの立場のある議員でも要約筆記を知らないという現実がそこにあった。

話は変わって。名古屋での会議に参加する前日に、名古屋市科学館で字幕付きプラネタリウムが久しぶりに開かれると聞いて見に行った。10 年以上前、科学館が新館になる前に一度行ったことがある。この時は涙ながらに星を見た。小学生の頃、学校で渋谷のプラネタリウムに行ったが、説明も何も聞こえず、ただ星を見て飽きて寝るだけだった。科学館で見た字幕付きプラネタリウムでは、星や星座のそばに字幕が出て、生まれてはじめて星や星座の説明が分かり、図鑑などで得ていた知識とやっと結びついた嬉しさは今でも忘れられない。

今や科学館は新しい建物になり、生命館、理工館、天文館と分かれ、プラネタリウムの他に、竜巻ラボ、放電ラボ、極寒ラボなど大型展示がたくさんあって、家族連れやアベックなどで大混雑だった。

この科学館の字幕プラネタリウムの歴史は古い。地元の要約筆記等研究連絡会「まごのて」という 1978 年結成の歴史のあるサークルが、名古屋市難聴者・中途失聴者支援協会（名難聴）と共催で開催してきている。

第 1 回の字幕付きプラネタリウムは 1995 年に実施されたとか。きっかけは、サークルの難聴者からプラネタリウムを楽しみたいという声があがり、交渉を重ねてやっと実現したと聞いた。この科学館は学芸員の生解説が特徴。星の輝きを妨げない字幕を映し出すため、字幕作成には大変な苦労があったし、様々な工夫を重ねてきたそう。

科学館側と何度も打ち合わせを重ねるなかで、学芸員の協力も少しずつ得られるようになったとか。長い間、生解説の冒頭で言われるセリフは「今回のプラネタリウムは、聞こえない人、聞こえにくい人向けに字幕付きでお送りします」だった。それが今回は、学芸員の皆さんで考えた「様々な人に楽しんでいただけるよう、今回は字幕付きでお送りします」というセリフに変わった。「まごのて」、名難聴、科学館の長年の取り組みが生んだ素晴らしいセリフ。字幕付けが終わってからお会いした「まごのて」メンバーのやりきったような笑顔がとてもまぶしかった。

協会は以前新宿区の助成事業で、新宿区立新宿コズミックセンターのプラネタリウムに字幕を付けたことが何度かあった。しかし、主催者側がつける様子も見られず、次の助成事業で字幕付け講座を行ったところ、講座修了者により、区民による字幕サークルが結成され、現在もコズミックセンターの字幕プラネタリウムに字幕を付けているそう。主催の公益財団法人新宿未来創造財団はヒアリンググループを導入したと聞く。ほんの少し理解が広がった。

正直なところ、長年活動をしていると、挫折感や疲労感からときには投げ出したいと思うことも少なくはない。それでも諦めないでいろいろな人を巻き込みながら、声を上げていかなければ、行動していかなければ何も変わらない。中途失聴・難聴者についての社会の理解はまだまだだが、今後も皆で力を合わせて行動していきたい。